

巻頭言

日本惑星科学会の第17期運営委員会を代表して挨拶します。会長の竝木則行です。この役目に就いてまだ一月も経っていませんが、会長職に紐づいた仕事が既にぞろぞろと始まって、先が思いやられます。流れに身を任せて、大過なく2年間に耐えることも考えられなくはないですが、一生に一度の役目ですので(...のはずですので)、自分らしい課題に取り組んでみようと考えました。それは、他の学会やコミュニティとの連携を深めて自由に議論を戦わせる場を作ることです。

会長が先頭に立って働き始めると、他の運営委員、特に副会長と総務専門委員会が迷惑します。教授が張り切ると助教が振り回されるとか、政治家が出しゃばると五輪組織委員会が尻拭いに走り回るとかというパターンです。自分自身もそういう苦勞を重ねてきていて、『申し訳ない』と思うのですが、年齢を重ねると頭頂葉が衰えるのか自制心が働かなくなります。前頭葉が弱って思考力と判断力が落ちているのかも知れません。取り敢えず、中村昭子副会長、今村剛副会長、保井総務専門委員長にはごめんなさいです。先に謝ったので、もう自由にやらせて貰えましょう。

私は惑星探査の仕事をする事が多くて、どうしても「将来、大型の惑星探査を実現するためには？」みたいな事を考えてしまいます。月のアルテミス計画や、日本独自の火星探査などです。真面目に考えると、これらの大型探査は惑星科学会が総力をあげて取り組んでも成し遂げられるのかわからないくらい難しいミッションです。ましてや、火星衛星探査(MMX)や次世代小天体サンプルリターン等などと同時並行で開発するのは至難です。日本が独自の火星探査を実現するためには、大型月探査・開発に取り組んでいくためには、従来の宇宙科学分野の枠組みを外した大連携が必要であることは自明であるように私には思われます。

そういう考えは何も新しいアイデアではありません。これまでも多くの方々が、SGEPSSや天文学会、日本航空宇宙学会、宇宙生物科学会 etc.と研究交流を図ってこられました。それを学会間の活動にしようということです。もちろん、相手あつての話ですから、一筋縄には行かないでしょう。障害はあるかも知れませんが、その先に広がる可能性に私はワクワクしています。一緒に取り組んでくれるお友達を募集中です

竝木 則行(国立天文台)